

「光の子として」

2022年8月14日

エフェソの信徒への手紙5：6～20

佐々木 佐余子

明日15日は終戦記念日（敗戦記念日）です。いろいろな資料を読むと、大方の日本人は大国アメリカと戦っても勝ち目はないと知っていたそうですが、なぜ、止められなかったのでしょうか。でも戦争によって多くの尊い人命が奪われ、今も後遺症で苦しんで亡くなっていく人もおられるのです。家族も一生悲しみを引きずって生きていかねばなりません。今、核軍縮よりも核が拡大しているので、この先どうなるか恐ろしいです。「この道はいつか来た道」にならないよう、世界の叡智を集結し、祈りを合わせて人類がお互い共存するよう、祈りたいと思います。

6節に「むなしい言葉に惑わされてはなりません」とパウロは教えました。むなしい言葉とは、パウロがいない間に教会に入ってきた違う教えです。そのことが使徒言行録に書かれているのです。使徒言行録の20章29節です。「わたしが去った後に、残忍な狼どもがあなたがたのところへ入り込んで来て群れを荒らすことが、わたしには分かっています」とパウロは予想しているのです。これはパウロが3年もの間エフェソで伝道して、これからエルサレムに行こうとしていた時に、送別説教として語った一部です。残忍な狼どもは教会の外にも中にもいて、純真な人々を惑わし、主の福音よりも律法を大事にしないで、と教える人たち、自ら使徒と自称する人たち、グノーシスの人たち、この人たちは大変厄介な人たちで、説明すると私にもよくわからないのですが、グノーシスはギリシャ語で知識という意味なのです。1世紀から2世紀に渡って広がり、宗教を信仰としてより、知識としてみるようになり、いろいろな宗教の混じりあった混交宗教ということなのです。キリスト教では異端としており、パウロはグノーシスを看過できずコロサイの信徒への手紙を執筆したと言われています。そして、ニコライ派の人たち、この人たちは「ヨハネの黙示録」にもありますが、彼らはバプテスマを受けた者は、罪に落ちることはないのだと主張し、性的に乱れても罪とは思わない都合のいい人たちなのです。そのような人々がエフェソ教会を牛耳り、信仰の浅い信徒たちをたぶらかして不安に陥れていたのです。パウロはそういう人たちに神の怒りが降ると警告しています。7節に「だから、彼らの仲間には引き入れられないようにしなさい」と教えているのです。エフェソの信徒たちは少しも惑わされませんでした。後でイエスキリストから誉められているのです。「ヨハネの黙示録」に書かれています。1世紀ごろ書かれたのですが「あなたが悪者どもに我慢できず、自ら使徒と称して、実はそうでもない者どもを調べ、彼らのうそを見抜いたことも知っている。あなたは良く忍耐して、わたしの名のために我慢し、疲れ果てることがなかった」と言われています。8節に「あなたがたは、以前には暗闇でしたが、今は主に結ばれて、光となっています。光の子として、歩みなさい」は強烈ですね。この言い方、エフェソの人たちは教会に行く前は暗闇の子だったのです。アル

テミスの女神を信じ、偶像を拜んで世の人と同じ行いをしていたかもしれません。

明日 15 日は終戦（敗戦）記念日なので、第二次世界大戦で起こった実話をお話します。とても感動的な実際起こった出来事です。アメリカのパールハーバー（真珠湾）で、その日は日曜日、青い空、男の人は礼拝に出るため髭をそり、女性は身を整えていました。そこへ突然日本の爆撃機が爆弾を落としました。結果 2300 人のアメリカ人が亡くなりました。軍隊を指揮していたのは、淵田みつおという人で特攻隊の指揮官でした。アメリカ人は大変日本人を憎みました。その 1 人にジェイコブ・ディシェイザーという人がいて、いつか日本人の卑劣な行為を思い知らせてやると憎しみに燃えました。ディシェイザーはアメリカ軍の兵隊になり、パイロットになって名古屋方面に爆撃を落としました。ところがガソリンが切れてしまい不時着をしたのでした。彼は捕らえられ監獄に入れられました。食事は固いパンでミミズが浮いているスープだけでした。度々拷問を受け、彼は激しく日本人を恨みました。ところが青田という看守が、ある時英語の聖書を渡してくれました。ディシェイザーの両親はキリスト教徒でしたが、聖書は読んだことはなかったのです。読むうちイエス・キリストが十字架上で語られた言葉、「父よ、彼らをお赦してください。彼らは何をしているのかわからないのです」（ルカ 23:34）という御言葉が心に届きました。それから、彼の態度は変わりました。朝看守が来ると「おはようございます。Good morning Sir」と言えるようになったのです。戦争が終わり敗戦になると、日本人の心が変わりました。パールハーバーに爆弾を落とした淵田さんはそれまでは、英雄でしたが、急に世間の目は一変し、手のひらを返したように冷たくなりました。酒を飲み生活が荒れました。一方、本国に帰ったディシェイザーはアメリカの神学校に行き牧師になりました。そして牧師になって日本に布教しに来ました。ある日、渋谷で伝道していて、道行く人たちにキリスト教のパンフレットを手渡していた時、淵田さんが通りがかりに渡されたのです。そのパンフレットにはキリストのみ言葉が書かれていました。「父よ、彼らをお赦してください。彼らは何をしているのかわからないのです」を読んで、この彼らの中に自分も入っているのだ、と淵田さんは悟りました。そして、洗礼を受け牧師になったのでした。淵田さんとディシェイザーは話をし、お互いの境遇に驚きました。2 人はその後アメリカに行き懺悔の伝道をしたのです。教会を回りどうして救われたか話をしました。けれどアメリカ人は冷たく、どうしてもパールハーバーに戻ってしまうのでした。けれど、彼はあきらめないで真実に起こったことを話すうち、アメリカ人も次第にわかってきて理解してくれるようになったということです。戦争を知らない人は平和を語れないと言います。2 人は兄弟になってお互いを赦し合い、今はアメリカ中を伝道して廻っているということです。「戦争は 2 度としてはいけない。お互いの憎悪が戦争を産む」と伝えています。

その後、淵田さんは 70 歳になる前に死亡するのですが、訃報を聞いた時、ディシェイザーは号泣したと言われています。憎しみから愛へと変えられた人々です。でも残された家族同士で親交が続いているということです。2 人は以前、暗闇の子でしたが、イエス・キリス

トを信じることによって光の子に変えられました。私たちはあの 2 人のような壮絶な経験はないと思うけれども、神さまはお一人おひとり招いて光の子として歩むようにしてくださっているのです。それにしても、御言葉の力は偉大ですね。2 人とも主イエス・キリストの十字架のお言葉に出会わなかったならば、相変わらず人を憎んで終わっていたかもしれません。パウロが言うように「十字架の言葉は、滅んでいく者にとっては愚かなものですが、わたしたち救われる者には神の力です」(コリント一 1:18) の通りです。パウロはこのように続けます。9 節「光から、あらゆる善意と正義と真実とが生じるのです」と。

パウロはさらに問いかけます。10 節「何が主に喜ばれるかを吟味しなさい」。何が主に喜ばれるのでしょうか。パウロはローマの信徒への手紙でも同じことを言っています。「あなた方はこの世に倣ってははいけません。むしろ、心を新たにしてお自分を変えていただき、何が神の御心であるか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全な事であることをわきまえるようになりなさい」と教えます。(ローマ 12:2) 不純なこの世のしきたり、習慣の中から、主に喜ばれるものをえり分け、探り当てていく、わきまえていくことが大事だと教えます。何が喜ばれるのか、それはパウロの今までの実践に倣うことです。そのことが 15 節から現れます。今は悪い時代であるので、賢い者として、無分別にならず、酒に酔いしれることなく、酔いしれるとはひどく酔って正気でなくなることです。人が酒に酔いしれると、人格が変わり理性が働かなくなると数々の失敗をします。枚挙にいとまがありません。それは身をもち崩す元だと言います。パウロはイザヤ書を引用して励ましています。「眠りにについている者、起きよ。死者の中から立ち上がれ。そうすれば、キリストはあなたを照らされる」(イザヤ 60:2) 眠りにについている者とは暗闇にいる人です。そういう人は死んでも同然なのですが、キリストはあなたを起きあがらせて照らしてくださる、だから、光に歩みなさい、と言っているのです。19 節は有名な御言葉です。「詩編と賛歌と霊的な歌によって語り合い、主に向かって心からほめ歌いなさい」と教えます。この御言葉は「コロサイの信徒への手紙」にも書かれています。(3:16)「詩編と賛歌と霊的な歌により、感謝して心から神をほめたたえなさい」とあります。私は前、詩編を読んで驚いたことがあります。「主を賛美するために民は創造された」とあるのです。詩編 102 編 19 節です。人は何のために生きているのだろうか、食べるため？働くため？と悩んでいた時に若い頃、ここを読んで驚きました。人は神さまを賛美するために生まれたと書いてあるのです。私も青春時代は何かと悩むことがあったのですが、ここを読んで聖書ってすごい本だと思いました。「神を賛美するために人は造られた。後の世代のために、このことは書き記されねばならない」とあります。

主を賛美するために民は創造された。」これが聖書のメッセージです。新約聖書に依って言えば、「イエス・キリストを賛美するために民は創造された」のです。然るに、わたしたちがこのように主の日に集められ、主を賛美する礼拝を捧げることは人間の本来の理(ことわり)なのです。そして、語り合いという言葉があります。語り合うことは、日常の生活において、常に賛美し光の子らしく歩むことです。私は車を運転する時、いろいろな C.D を聞くのです。今は北田康広という福音歌手の賛美を聞いています。皆さまもご存じだと思います。

ますが、前コンサートをされたそうですね。北田さんの豊かな声量と神さまを賛美する歌声を聞いていると、自分が何と小さなことで思い煩っているのかと思いました。北田さんは心から賛美して、神さまに感謝して歌っているように思えました。盲目の人がここまでくるに相当の試練があったでしょう。光の子として、わたしたちも闇から救われて歩んでいます。今日から始まる一週間も賛美を語り合いながら過ごしたいと思います。